

家族構造と中学生の教育アスピレーション(1)

—セレクション効果なのか?—

首都大学東京 稲葉昭英

1 目的

子ども期の家族構造とその後の教育達成やライフコースに大きな関連があること、そうした関連は二人親世帯に比較してひとり親世帯の不利という形をとることが、日米双方の経験的研究から確認されてきた(McLanahan and Percheski,2008;稲葉, 2008;2011a; 201b;坂本, 2009;余田, 2012 など)。これらの結果はきわめてロバストであり、そうした格差は少なくとも大学進学に関してはほとんど縮小する傾向が見られず、女性に関してはむしろ拡大傾向にあることが指摘されている。

さて、こうした格差が生成するメカニズムに関しても様々な研究が行われている。この問題を考えるとき、いつごろから家族構造による差異や格差が出現するのかが重要な意味を持つてくる。SSM-J2005 を用いた稲葉 (2008;2011a) では、遡及的な方法ではあるが 15 歳時点の家族構造と中学 3 年時の大学進学希望や成績との間に大きな関連が示された。では、遡及法ではなく、実際に中学生を対象に測定を行った結果からも、同様な事実を検出できるのだろうか？

本報告では家族構造と中学校 3 年生の教育アスピレーション (将来の進学希望)、成績 (主観的な評価) などの学習関連変数との関連を検討する。

2 方法

本報告では内閣府による「親と子の生活意識に関する調査」データを用いる。同データは、2011 年 10 月末から 11 月にかけて内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室によって実施された調査であり、1996 年 4 月 2 日から 1997 年 4 月 1 日生まれまでの子 (中学 3 年生) とその保護者 4000 組を対象に訪問留置き法によって行われた。回収された保護者-子のペアは 3178 組 (79.5%)、うち父母 (義父母を含む) は 3159 (79.0%) 組である。本報告では後者の 3159 名を基本的な分析対象とする。分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属 SSJ データアーカイブからデータの提供を受けた。

3 研究課題と仮説の設定

主要な従属変数に中学 3 年生 (子) の教育アスピレーション (理想学歴) および成績 (主観的評価) を置く。独立変数として、家族構造を父子世帯、母子世帯、二人親世帯の 3 者を区分する。これは調査時点の家族構造である (このほか、さまざまな統制変数を使用する)。ここで問題になるのが父子世帯や母子世帯の形成がそれ以前の一定の特性と結びつくことで生じるセレクション効果である。ここでは家族構造による差異がセレクション効果に起因するかどうかも検討する。

4 結果と考察

教育アスピレーション、成績はそれぞれ家族構造と大きく関連していた。セレクション効果を考慮しても、母子世帯の子は二人親世帯の子に比較して教育アスピレーション、成績がともに低いという結果が示された。これらの効果の多くは貧困・低所得で説明された。しかし、父子世帯にはさらに大きな格差が示され、これらは貧困・低所得の効果で説明できるものではなかった。

付記：本研究は、東京大学社会科学研究所社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点による 2013 年度課題公募型共同研究「家庭環境と親と子の意識に関する研究」(代表・平澤和司・北海道大学教授) の一環である。なお、「親と子の生活意識に関する調査」の報告書は内閣府より Web 上で公開されている。